

頓悟漸修について

——『裴休拾遺問』を中心として——

石井修道

ここに主に問題とする『裴休拾遺問』については、昨年発表の拙論「洪州宗について——真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』と『六祖壇經』の紹介に因んで——」（『印度学仏教学研究』第二八卷第一号 昭和五四年一二月）の紹介に基づいて行い、校訂本文は発表予定の「禅学研究」第六〇号に依るものである。

頓悟漸修についての研究は、すでにすぐれた先学によつてなされているが、この問題で欠くことできないところの従来『禪門師資承襲図』（裴休と宗密との問答のみ）で呼ばれていた文献の異本が真福寺本『裴休拾遺問』であり、その中には、裴休（七九七—八七〇）と圭峰宗密（七八〇—八四一）との問答に限らず、蕭俛相公・史山人・温造尚書との問答があつて、しかも『裴休拾遺問』の書名は椎名宏雄氏が指摘されるようにすでに宋代の書目にみられるので、ここで全体をまとめて圭峰宗密の頓悟漸修説を考えてみようとするものである。

頓悟漸修を考える場合、まず「頓悟」を華嚴教学で禪宗の教えとどう関連づけるかの問題を整理しなければならないであらう。

禪宗の教えを華嚴学の教判の五教判において、頓教に配したのは清涼澄観（七三八—八三九）が最初であり、宗密はこの説を承けるものである。『大方広仏華嚴經随疏演義鈔』卷八には、

即順禪宗者、達磨以心伝心、正是斯教。若不指一言以直説即心是仏、何由可伝。故寄無言以言、直詮絶言之理、教亦明矣。故南北宗禪、不出頓教也（大正藏卷三六—六二b）

とある。禪宗では南頓北漸という南北の対立がありながらも、頓教に相当させている。この点を宗密は『円覚經大疏鈔』卷三之上に、

即順禪宗者、達磨大師、以心伝心、正用斯教。若不指一言以直説即心是仏心要、何由可伝。故寄無言之言、直論言絶之理、教亦明矣。

南宗禪門、正是此教之旨。北宗雖漸調伏、然亦不住名言、皆不出頓教。故云順禪宗也（統藏經卷一四—二六三c）

とあるように、南宗禪と北宗禪の違いはあつても教判からいえば禪宗は頓教であるとするのである。しかし禪宗は頓悟であつて頓教ではないので、五教判では分類不可能な部分を残し、華嚴の体系の中に修証論を確立していかざるをえなかつたのである。ここに「頓悟」論が修証論として修行の分類を發展させた。宗密の『大疏鈔』卷三之下や『略疏鈔』卷四にまとめられる頓と漸の悟修の分類は、まだまとまつてはいないものの澄観にすべてみられ、(A)『華嚴經行願品疏』卷一（統藏經卷七一—二五二a）と(B)『演義鈔』卷二一（大正藏卷三六一—一六四c）を参考にすれば、

若明悟相、不出二種。一者解悟、謂明了性相。二者証語、謂心造玄極。若明頓漸者、乃有多門。

とあり、以下五つに分類整理できる。

(1) 頓悟漸修……(A)此約解悟。謂豁了心性、後漸修學令其契合。則
(解悟) 悟如月照、頓朗方法、修如弘鏡、漸瑩漸明。

(B)如見九層之台、則可頓見。要須躡階而後得昇。

今亦如是頓了心性、即心即仏、無法不具。而須積功遍修万行、此約解悟。

(2) 漸修頓悟……(A)謂初攝境唯心、次視心本淨、後心境双寂。瞥起
(証悟) 不生、前後際斷、湛猶停海、曠若虚空。此約証

頓悟漸修について（石 井）

名悟。則修如瑩鏡、悟似鏡明。

(3) 頓修漸悟……(B)即如磨鏡一時遍磨明淨有漸。万行頓修、悟則漸勝。此約証悟。

(4) 漸修漸悟……(A)亦是証悟。則修之与悟、並如登台、足履漸高、
(証悟) 所鑒漸遠。

(B)猶如斬竹節、節不同。

(5) 頓悟頓修。此通三義。

(イ)先悟後修……(A)若先悟後修、謂廓然頓了、名之為悟。不看証語、
(解悟) 不収不攝、曠然合道、名之為修。此則解悟。此定為門。亦猶不私不瑩而鏡自明。

(ロ)先修後悟……(A)若云先修後悟、謂依前而修、忽見心性、名之為
頓修頓悟 悟。此為証悟。則修如服藥、悟如病除。

(証悟) (B)如利劍斬絲、千茎齊斬、一時齊斷。亦如染千絲、
一時齊染、一時成色。故万行齊修、一時朗悟。

(ハ)修悟一時……(A)若云修悟一時、謂無心忘照、任運寂知。則定慧
(解悟・証悟) 双運。如明鏡無心、頓照万像、則悟道解証。

その他に禪宗を含む頓悟頓修の説や『華嚴經』の本来成仏（修悟一体）、『楞伽經』の四頓四漸が説かれるけれども、以上の分類で悟と修に関する頓漸の説はすべて問題にしているといえよう。澄観は同じ『演義鈔』の箇所に、現在みられる敦煌本『六祖壇經』の慧能の二つの偈の一部を神秀の偈と比較して引用しているので（大正藏卷三六一—一六四c）、禪宗の南宗禪と北宗禪は敦煌本『六祖壇經』のように明確に対立したも

のとして理解していた。また、さらに従来、澄観は荷沢禪・牛頭禪・北宗禪を学んでいた事は指摘されていたが、『行願品疏』巻二の「揚眉瞪目皆稱為道」（同、二五二a）の説は、明らかに洪州宗の禪についても熟知していたことを知らしめるものである。『行願品疏』の説の分析はさらに詳細な検討が今後必要となるであろう。

ところで澄観は南北二宗の禪宗を批判しつつ、同時にそれらの融会を図つたことは、頓悟漸修の説のみを重要視したのではない。この点、宗密は異つた立場をとることになる。そこで、現存統藏經本に欠けて、現在知訥の『法集別行録節要并入私記』によつて補われている頓悟漸修説の部分は、幸いに真福寺本『裴休拾遺問』は存するので、長文引用となるけれども紹介を兼ねて次にかかげよう。

今次明頓悟漸修両門者。然真如之理、尚無仏無衆生。況有師資伝授。今既自仏已来、祖代伝授。即知約人修証趣入之門也。既就人論、即有迷悟凡聖。從迷而悟即頓、転凡成聖即漸。

頓悟者、謂無始迷倒、認此四大為身、妄想為心、通認為我、若遇善友、為説如上不變隨緣、性相体用之義、忽悟靈明知見、是自真心、心本恒寂、無辺無相、即是法身、身心不二、是為真我、即与諸仏、分毫不殊、故云頓也。如有大官、夢在牢獄、身著枷鎖、種種憂苦、百計求出、遇人喚起、忽然覺悟、方見自身、元在自家、安樂富貴、与諸朝寮、都無別異也。言大官者、喻仏性也。夢者、

迷也。牢獄者、三界也。身者、阿頼耶識也。枷鎖者、貪愛也。種種憂苦者、受報也。百計求出者、問法勤修也。遇人喚起者、善知識也。忽然覺悟者、聞法心開也。方見自身者、喻法身真我也。元在自家者、經云畢竟空寂舍也。安樂者、寂滅為樂也。富貴者、体上本有河沙功德妙用也。与諸朝寮無異者、同諸仏之真性也。抛此法喻、一一分明、足弁夢悟身心本源雖一、論其相用、倒正懸殊。不可覺來還作夢事、官以喻心源雖一、迷悟懸殊。夢時拜相、《迷時修得大梵天等位》不及覺時作尉。《悟後初入十信位也》夢時七宝、《迷時修無量功德也》不及覺時百錢。《悟時持五戒十善也》皆以一妄一真、故不可類。《諸教皆云、施七宝三千界、不如聞一句偈。是此意也》

今洪州但言貪瞋戒定一種是仏性作用者、欠於揀弁迷悟倒正之用也。彼意在真如心性無愚故、不揀択、及就真性、即本無言説、誰道異同。今既有師資相伝、即須揀弁倒正。

次明漸修者、雖頓悟法身真心全同諸仏、而多劫妄執四大為我、習已成性、難卒頓除。故須依悟漸修、損之又損、乃至無損、即名成仏。非此心外有仏可成也。然雖漸修、由先已悟煩惱本空、心性本淨故、於惡断而無断、於善修而無修、為真修断矣。

問、若悟了復修者、抛前夢喻、豈不似覺來更求出獄脱枷乎。答、前但喻頓悟義、不喻漸修義。良由法有無量義、豈唯一義。故涅槃經、雖唯談仏性、而以百喻、各有既会、不可乱用。今明漸修喻者、如水被風激、成多波浪、便有漂溺之殃、或陰寒之氣、結成氷凌、即阻漚滌之用、然水之濕性、雖動靜凝流、而未嘗變易。水者、喻真心也。風者、無明也。波浪者、煩惱也。漂溺者、輪廻六

道也。陰寒者、無明貪愛之習氣也。結成冰凌者、堅執四大双質礙也。即阻漚漚、漚、喻雨大法雨、滋潤群生、生長道芽。漚、喻蕩除煩惱、迷皆不能、故云阻也。然水之濕性、雖動靜凝流、而未嘗變易者、喻貪瞋時亦知、慈濟時亦知、憂喜哀樂、種種變動、未嘗不知、故云不變也。今頓悟本心常知、如識不變之濕性、心既無迷、即非無明、如風頓止、悟後自然、攀緣漸息、如波浪漸停、以戒定慧、資薰身心、漸漸自在、乃至神變無礙、普利群生、名之為仏、如春陽水泮、漚漚利万物也。

洪州常云、貪瞋慈等皆是仏性。有何別者、如人但觀濕性始終無異、不知濟舟覆舟、功過懸殊。故彼宗於頓悟門雖近而未的、於漸修門有誤而全乖。牛頭已達空故、於頓悟門而半了、以忘情故、於漸修門而無虧。北宗但是漸修、全無頓悟、無頓悟故、修亦非真。荷沢則必先頓悟、依悟而修。故《円覚》經云、若諸菩薩、悟淨円覚、《悟也》以淨覺心、取靜為行、由澄諸念、覺識煩惱動等。《修也》此頓悟漸修之意、備於一藏大乘、而起信・円覚・華嚴是其宗也。若約各為一類之機、善巧方便、広開門戸、各各誘引、熏生生之習種、為世世之勝緣、則諸宗所説、亦皆是諸仏之教。諸經論具有其文也。

この『裴休拾遺問』の箇所では宗密の頓悟漸修説が、明確に理解でき、さらに頓悟と漸修の別々の喩説でも詳述されている。

また、前回の論文にも述べたように、『裴休拾遺問』は、洪州宗よりさらに荷沢宗が優秀であることを示すために撰述

された訳であるから、頓悟漸修説においても、荷沢宗のみが完全であるとするのである。澄観の時代より禪宗に発展があり、北宗の勢力はすでに南宗に替わり、南宗の中でも洪州宗の大きな勢力が宗密にとつて問題であつた。宗密は弘忍―智説―処寂―無相―浄衆―神会―南印―道円―法系を荷沢神会―法如―惟忠―道円に捏造してまで荷沢宗を主張した背景には、澄観にはない宗密の荷沢禪と『円覚経』による教禪一致思想の構築が必要であつたからである。

それでは荷沢神会の頓悟漸修説とはどのようなものであろうか。その説と宗密の説との関係はどうかをみてみよう。同じ『裴休拾遺問』にある「答史山人十問」の中に次のような問答がみいだせる。

一問、云何是道。何以修之。為復必須修成、為復不俟功用。答、無礙是道。覺安是修。道雖本円、妄起為累。妄念都尽、即是修成。三問、其所修者、為頓為漸。漸則忘前失後、何以集合而成。頓則万行多方、豈得一時円満。答、真理即悟而頓円、妄情息之而漸尽。頓円如初生孩子、一日而肢体已全。漸修如長養成人、多年而志氣方立。

この中で頓悟漸修の喩説こそ荷沢神会が頓悟漸修説を説く時に使用するもので、『菩提達摩南宗定是非論』に次のようにある。

遠法師問、如此教門、豈非是仏法。何故不許。和上答、皆為頓漸

不同、所以不許。我六代大師一一皆言、單刀直入、直了見性、不言階漸。夫學道者須頓見仏性、漸修因縁、不離是生、而得解脫。譬如母頓生子、与乳、漸漸養育、其子智慧自然增長。頓悟見仏性者、亦復如是、智慧自然漸漸增長。所以不許。（胡適博士『神会和尚遺集』二八七頁。一九六八年）

宗密はしばしばこの人間の誕生と成長の喩説をもつて頓悟漸修説を展開した。荷沢神会の説が、先の引用では『円覚經』（大正藏卷一七—一九七c）の頓悟漸修説と一致することを主張するが、次の『華嚴經』卷八（大正藏卷九—四四九c）の説でも同じであるとする。

有云、先須頓悟、方可漸修者、此約解悟也。（約斷障説、如日頓出、霜露漸消。約成德説、如孩子生、即頓具四肢六根、長即漸成志氣功用也）故華嚴説、初發心時即成正覺、然後三賢十聖、次第修証。若未悟而修、非真修也。（良以非真流之行、無以稱真、何有修真之行不從真起。故彼經説、若未聞此法、多劫修六度万行、竟不証真也）。（鎌田茂雄博士訳注『禪源諸詮集都序』一九一頁。筑摩書房 昭和四十六年）

また、『起信論』の本覺・不覺・始覺と頓悟漸修の關係が『裴休拾遺問』の「答溫尚書所問」の中にみられ注目される。整理して示すと、次のように示される。

又答山南溫尚書所問。先奉問、悟理息妄之人、不結業、一期壽終之後、靈性何依者。

對。（釈曰、馬鳴菩薩、撮略百本大乘經宗旨、以造大乘起信論。

論中立宗、説一切衆生心、有覺義・不覺義、覺中復有本覺義・始覺義）

（本覺）一切衆生、無不具有覺性、靈明空寂、与仏無殊。（不覺）但以無始劫來、未曾了悟、妄執身為我相、故生愛惡等情。隨情造業、隨業受報、生老病死、長劫輪迴。然身中覺性、未曾生死。如夢被驅役、而身本安閑。如水作水波而濕性不易。（始覺—頓悟）若能悟此性、即是本身、本自無生、何有依託。靈靈不昧、声聞常知、無所從來、亦無所去。（始覺—漸修—イ受生自在）然多生妄執、習已成、喜怒哀樂、微細流注。真理雖已頓達、此情難卒除。須長時覺察、損之又損、如風頓止、波浪漸停。豈可一生所修便同諸仏力用。（正是悟理之人、朝暮行心修習止観之要節也）但可以空寂為自体、勿認色身。以靈知為自心、勿認妄念。妄念若起、都不隨之、即臨命終時、自然業不能繫。雖有中陰、所向自由、天上人間、隨意寄託。（ロ變易自在）若愛惡之念已泯、即不受分段之身、自能易短為長、易鹿為妙。（ハ究竟自在）若微細流注、一切寂滅、唯円覺大智、朗然独在、即隨機應現千百億身、度有緣衆生、名之為仏。

頓悟漸修が始覺と關係して説明され、理論面を明確にしなから実践面とも結びつけていることは、宗密が教を否定する禪者と禪を否定する教者を共に批判して主張する教禪一致がみごとに表わされているといえよう。この始覺と頓悟漸修の理論は、後に臨濟禪の主流となる看話禪の理論面と一致してくる重要な問題といえる。また田中良昭氏の「敦煌本『禪源

諸詮集都序」残卷考」(六七頁。「駒沢大学仏教学部研究紀要」第三七号 昭和五四年)の論文によると、迷悟の図式も明藏本で知られる図とは異り、宗密は『都序』でも覺を頓悟漸修で説明していたことがわかる。

結局、宗密は『華嚴經行願品疏鈔』卷一に、「万行亡照而齊修、漸頓無礙而双入」を解釈し、

今既円宗直談真界、則非漸非頓。隨緣修証則具漸具頓。如經云、初發心時即得阿耨菩提。然始從十住十行乃至等覺妙覺。不壞行位、故具漸頓也。禪門悟即刹那而登妙覺、一悟之後、念念相応、習氣唯微、本智唯瑩、具漸頓也。故荷沢大師、開示頓悟漸修爲円妙也。後銷疏意者、然隨緣說、有凡聖迷悟、故言漸頓。緣起無性舉体但是真源。故云漸頓無礙、即由無礙而漸頓冥契妙極、故云双入。

問、抛上所說、即先頓後漸、一念頓悟而長時漸修。如何得成双入。答、一念悟時、即離染著、便是修行。一悟永悟、尽未來際、而無間斷。修亦念念相応、而無休息、故始終相収、皆名双入。

又問、此句是証、何故兼修說耶。答、上句是証之修、故云亡照。此句是修之証、故云漸頓。又無礙無相、修証皆妙、故云双入也。所以四十二位、位位成仏也(統藏經卷七—四〇七c)

とあるところにもまとめてみられるように「頓悟」は理としてあり、悟理の人としての修行が述べられていることになる。澄観が頓悟漸修を解悟に配したのを出るものでなく、解

悟とはあくまで「性と相とを明了にする」立場であつた。後の禪宗の流れからは、理も事も突き破れない限界がみえる。しかし宗密の説は、『首楞嚴經』卷一〇の頓悟漸修説の理則頓悟、乘悟併銷、事非頓除、因次第尽。(大正藏卷一九—五五a)と共に、永く中国仏教の教学に影響を与えつづけた点は見逃すことのできない宗密の意義であらう。

1 荒木見悟博士「仏教と儒教」(平樂寺書店 昭和三八年)、鎌田茂雄博士「宗密教学の思想的探究」(東京大学東洋文化研究所 昭和五〇年)などがある。

2 椎名宏雄氏「宋元代の書目における禪籍資料」(一)「曹洞宗研究員研究生研究紀要」第七・八号 昭和五〇・五一年)の「崇文總目輯釈」「通志芸文略」「宋史芸文志」に名がみえる。

3 吉津宜英氏「澄観の禪宗観について」(「宗学研究」第二二号 昭和五五年)の論文に有益な示唆をえた。

4 澄観は『華嚴經疏』撰述の意圖を『演義鈔』卷二に「用以心伝心之旨、開示諸仏所証之門。会南北二宗之禪門、撮台衡三觀之玄趣、使教合亡言之旨。心同諸仏之心。無違教理之規、暗踏忘心之域」(大正藏卷三六—一七a)という。

5 永明延寿は『宗鏡録』卷三六に、「首楞嚴經云、理雖頓悟、承悟併消、事在漸修、依次第尽」(大正藏卷四八—六二六c)と「頓悟漸修」の成語として引用している。

(駒沢大学助教授)